鹿大「進取の精神」支援基金　平成 29 年度 留学生受入推進事業
研究留学生受入推進プロジェクト　報告書

2018 年 9 月 27 日

1. 申請者 （所属・職名・氏名）	法文学部・准教授・鵜戸聡
2. 受入留学生 （国・大学・学年・氏名）	台湾・国立成功大学・修士 2 年・周佳瑩
3. 留学生受入期間	2018 年 3 月～2018 年 8 月
4. プログラム研究分野	社会言語学

5. 本プログラムの目的と概要と成果（申請者／日本語）

昨今日本との交流がますます盛んになっている台湾だが、日本統治期には教員や警官として非常に多くの九州人が渡航したことが知られており、現地で使用された日本語に九州方言の影響も見られるという。鹿児島大学の前身である鹿児島高等農林学校でも多くの台湾人が学んでおり、ここで助教を務めた田代安定は南西諸島の人類学研究の先駆けとして知られているが、その後台湾に渡って熱帯植物学の基礎を築いた。このような歴史的背景もあり、本学総合図書館には当時の台湾関係資料が数多く残されている。

本プログラムの目的は、本学にどのような資料が残されているかを把握し、それらを利用しつつ、リージョナリズムの観点から独自の台湾研究を構想していくことであり、翻っては南九州地域の歴史・文化を再考する機会につなげていくことを目指している。

今回は、受入留学生の専門と関心を考慮し、日本統治時代の出版物を対象に、元来口語である台湾語（現在の中華民国政府の「国語」である中国語とは別の言語）がどのように記録されているか、とりわけ日本人警官向けの台湾語教科書や台湾人向けの日本語教科書を参照しつつ、地方語の近代化・文章語化の契機を探ることによって、地方言語文化の再評価を試みる。

また、本学学生を対象に台湾で海外研修を行っているため、その事前研修に参加してもらい、帰国後は現地での引率にも協力してもらう。

6. 鹿児島大学での研究活動と成果（Student／English or Japanese）

Explain your activities and achievement for your research in Kadai.

指導教員の鵜戸先生の講義で言語学史や社会学における多元主義について学説史的な勉強をして研究のための基礎力を養いながら、鹿児島大学総合図書館所蔵の資料を利用しつつ日本統治期の台湾語／日本語翻訳について研究しました。特に、警察・裁判所関係者向けの台湾語学習雑誌「語苑」に注目していますが、言葉の翻訳や文章の作成には、当時の社会状況が密接に関わっており、このことを考えるために、フランスの社会学者ピエール・ブルデューの「言語場」「文学場」などの概念を利用できないかと思いつきました。幸い鵜戸先生がブルデューに詳しく、日本人学者の関連論文やブルデューの日本講演集を教えていただき、それらを会読しながら台湾語の事例にどのように利用できるか指導してもらいました。今後の展望としては、日本統治期の台湾人や日本人がどのようにして台湾語を「近代化」しようとしたのかを研究することによって、民主化以降の台湾における台湾語の推進運動について、その課題を言語学的・社会学的に考えていくことができるのではないかと思います。

帰国後は、鹿児島大学で学んだ知見をもとにして修士論文を作成し、博士課程に進学して研究を続けていきたいと思っています。